7　次の文章は、『平中物語』の一節である。主人公の平貞文は、ある女にいを寄せていたが、文をやり取りするまでには至っていなかった。貞文は、女に言い寄るつてを得ようと、日頃から女の家の前を行き来していたが、その機会はなかなか得られなかった。そんなある日の夜、女の元にいる女房たちとし、言葉を交わすこととなった。以下には、当日の夜及びその後のできごとが描かれている。これを読んで、後の問に答えよ。

〈岡山大〉　二〇一六年度出題

　また、このおなじ男、聞きならして、まだものはいひふれぬありけり。アいかでいひつかむと思ふ心ありければ、つねにこの家のよりぞ、きける。かうありけれど、いひつくたよりもなかりけるを、月などのおもしろかりける夜ぞ、かの門の前渡りけるに、女ども多くイ立てりければ、馬よりおりて、この男、ものなどいひふれけり。いらへなどしける、男うれしと思ひて、立ちとどまりにけり。この女ども、男の供なりける人に、「たれぞ」と問ひければ、「の人なり」とぞへけるに、この女ども、「音にのみ聞きつるを。いざ、呼びすゑて、ものいはむ」、「いかがあると聞かむ」とて、「おなじうは、この庭の月をかしきをも見せむ」といひければ、この男、「なにのよきこと」とて、もろともに入りにけり。女ども集まりて、簾のうちにて、「あやしう、ウ音に聞きつるが、うつつに、よそにても、ものをいふこと」と、男も女もいひかはして、をかしき物語して、も、心つけてものいふありけり。

　集まりてものいふなかに、男も、あやしく、うれしくて、いひつきぬることなど思ひてをりけるほどに、この男の乗れる馬、ものに驚きて、引き放ちて、走りければ、わらはべみな馬につきていにければ、わらは一人ぞ、とどまりて、えしらがひ歩きける。されば、この男、エかたはらいたがりて、招きて、「なにごとぞ」といひければ、されば、「早う隠れよ」とて、追ひ込めてけり。それを、この女ども、「なにごとぞ」と問ひければ、「なにごとにもあらず、馬なむものに驚きて放れにける」と、男答へければ、「いな、これは、夜ふくるまで来ねばのつくりごとしたるなめり」、「あな、むくつけ。はかなきたはぶれごとさへ、いふ妻持たらむものはなににかすべき」と、心憂がり、ささめきて、みな隠れぬ。この女どもに、この男、「あな、わびしや。オさらにさもあらず」といひけれど、さらに聞かず。はては、ものいひふれむ人もなかりければ、よろづの言葉をひとりごちけれど、さらに答へする人もなかりければ、いひわびてぞ、いでて来にける。

　さて、つとめて、ければ、男、かくいひやる。

　　⑴さ夜中に憂き取川わたるとて濡れにし袖に時雨さへ降る

とある返し、

　　⑵時雨のみふるやなればぞ濡れにけむ立ち隠れけむことやくやしき

とありけるに、喜びて、またものなどいひやれど、いらへもせずなりにければ、いはでやみにけり。

注一　その人なり＝これこれというお方だ。

注二　女＝この「女」は、男が想う女とは別人を指す。

注三　見えしらがひ歩きける＝わざと目立つように歩きまわった。

注四　妻のつくりごとしたるなめり＝奥さんが計略をしたのでしょう。

注五　名取川＝宮城県名取郡を流れる川。「名取る（評判を取る、される）」と掛詞にして、歌によく詠まれた。

問１　傍線部アイウエオを現代語訳せよ。

問２　波線部について、「女ども」がこのような態度を取ったのはなぜか、説明せよ。

問３　傍線部⑴の和歌について、男の心情を説明せよ。

◎問４　傍線部⑵について、掛詞を明らかにしつつ、現代語訳せよ。

# 【解答と採点基準】

問１　ア＝何とかして

イ＝立っていたので

ウ＝噂に聞い（てい）たが

「噂に聞いていた人が」も可。

エ＝きまり悪がって

「恥ずかしがって」「みっともながって」「体裁悪く思って」「苦々しく思って」も可。

オ＝まったくそういうことはない

「まったく」は「全然・少しも」も可。「そういうことはない」は「そういうこともない」「言うまでもない」も可。

問２　Ａ風流なやりとりをしている最中に、Ｂ馬がいなくなったという男の話を聞き、Ｃそれは夜更けまでやって来ない夫を困らせるための妻の計略だと考え、Ｄそういう嫉妬深い妻のいる男とはこれ以上関わりたくないと思ったから。

Ａ＝１〔「女たちと話をしていた時に」も可。〕

Ｂ＝２〔「男から聞いた」という内容でなければ減点１。〕

Ｃ＝３〔「妻の計略」がなければ０。〕

Ｄ＝４〔「嫉妬深い妻のいる」がなければ減点１。〕

問３　昨夜女房たちにＡ不本意な評判を立てられたためにＢ想いを寄せていた

女に会うことができず、Ｃ悲しみの涙で袖を濡らしたが、今日はＤ時雨までも降って袖を濡らし、ＥますますＦつらい思いをしているという心情。

Ａがなければ減点2。〔「嫌な評判を立てられた」「誤解された」

も可。〕

Ｂがなければ減点２。〔「思う女に言い寄る機会を失い」も可。〕

Ｃがなければ減点３。〔「泣く」という内容であれば可。〕

Ｄがなければ減点２。〔同内容でも「まで」がなければ減点１。〕

Ｅがなければ減点２。〔「さらに」「いっそう」も可。〕

Ｆがなければ全体０。〔「わびしさが募っている」「悲しみを深めてい

る」も可。〕

問４　あなたが奥さんと長く暮らした古い家だから、時雨が降ってばかりで雨漏りがして袖が濡れたのでしょう。

　　［別解］あなたが訪ねた私の家は古い家だから、時雨が降ってばかりで袖が濡れたのでしょう。

「古（る）」と「降る」の掛詞が表れていないものは全体０。「あなたが奥さんと長く暮らした」はなくても可。「だから」と確定条件になっていないものは減点２。「とりわけ時雨が降って」も可。過去推量の「けむ」の訳出「～たのだろう」がないものは減点２。

# 【現代語訳】

　また、この同じ男が、いつも（噂を）聞いて（心が惹かれ）、（でも）まだ気持ちを伝えてはいない（女が）いた。問１ア何とかして言い寄ろうと思う気持ちがあったので、いつもこの家の門の前を、歩き回っていた。こういう具合であったけれど、（女に）言い寄る手立てもなかったので、月などが美しかった夜に、あの門の前を通ったところ、女房たちがたくさん問１イ立っていたので、馬から降りて、この男が、言葉をかけた。（女房たちが）返事などをしたのが、男はうれしいと思って、立ち止まったのだった。この女房たちが、男の供であった人に、「（この人は）誰ですか」と尋ねたところ、（供人は）「これこれというお方だ」と答えたので、この女房たちは、「噂にだけは聞いていたけれど（実際に会えるなんて）。さあ、（こちらへ）呼び入れて、話をしましょう」、「どんな（方）なのか（話を）聞きましょう」と言って、「同じことなら、この（邸の）庭の月（の眺め）がすばらしいのも見せましょう」と言ったので、この男は、「なんてありがたいこと」と言って、（女房たちと）一緒に（門の中に）入ったのだった。女房たちが集まって、簾の内側で、「不思議なことに、問１ウ噂に聞い（てい）たが、現実に、簾越しで（あって）も、話をすること（ができるなんて）」と、男も女も言い合って、風流な話をして、女（たちの中に）も、（男に）関心を寄せて話しかけてくるのがいた。

　集まって話をするなかで、男も、不思議で、うれしくて、（うまい具合に）親しくなったことだなどと思っていた時に、この男の乗ってきた馬が、何かに驚いて、（綱を）振り切って（逃げて）、走っていったので、（お供の）子どもたちは皆馬についていったので、子ども一人（だけ）が、とどまって、わざと目立つように歩きまわった。それで、この男は、問１エきまり悪がって、（その子どもを）呼んで、「どうしたのか」と言ったところ、そう（いう次第）だったので、「早く（あっちへ）隠れろ」と言って、追い払ってしまった。それを（見て）、この女房たちが、「何事ですか」と尋ねたので、「何でもありません、馬が何かに驚いて逃げてしまったのです」と、男が答えたところ、（女房たちが）「いいえ、これは、夜が更けるまで（夫が）来ないので、奥さんが計略をしたのでしょう」、「ああ、恐ろしい。ちょっとした冗談ごとにまでも、（とやかく）言う妻を持っている人などはどうしましょう（どうにも相手にできないわ）」と言って、うんざりして、ひそひそ話をして、皆（奥に）行ってしまった。この女たちに、この男は、「ああ、つらいよ。問１オまったくそういうことはない」と言ったけれど、（女房たちは）全然聞かない。しまいには、（男が）話しかける人もなかったので、いろいろな言葉を独り言で言ったけれど、まったく答える人もなかったので、話しかねて、（邸を）出て（帰って）来たのだった。

　そうして、翌朝、時雨が降っていたので、男が、このように歌を詠んで送った。

昨晩恋の浮名の名取川を渡ろうとして浮名を取って誤解され、悲しみの涙を流して濡れた私の袖に、今朝は時雨までもが降って濡らし、ますますつらいことです。

とある（歌の）返歌、

　問４あなたが奥さんと長く暮らした古い家だから、時雨が降ってばかりで雨漏りがして袖が濡れたのでしょう。私たちが隠れたようなことがそんなに悔しいのでしょうか。

と（返歌が）あったので、（男は脈があると）喜んで、また歌などを送ったけれど、（あちらは）返事もしなくなってしまったので、（男も）手紙を送らず（この件は）終わったのだった。